

## ある地方大学教授のつぶやき



### 竹 中 繁 織

平成 28 年度の九州支部長を務めさせていただいています九州工業大学の竹中繁織です。平成 28 年 4 月に突然地震が熊本と大分を襲いました。これにより熊本、大分地区に多くの被害をもたらしました。まずは、この度の熊本と大分の地震により被災された皆様、ならびにそのご家族の皆様にご心よりお見舞い申し上げます。皆様の安全と被災地の一日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。私は、九州大学の高木 誠（故人）の研究室の助手として採用され、現在は九州工業大学の教授として分析化学に関与させて頂いております。平成 28 年度は、九州支部が設立されてから 60 周年となります。そのため、本年 11 月に記念式典を行います。また、九州支部では、他学会の九州支部と合同で毎年 7 月初めに 1000 人規模の化学関連支部合同九州大会を行っております。本年度、分析化学会九州支部が担当となり第 53 回大会を行いました。このような時期に支部長を拝命したことは高木教授より分析化学会九州支部にもっと貢献しなさいと言われていたような気がしてなりません。

私が高木教授のもと、助手だったころから大学も大きく変わってきました。文部科学省も各大学は各大学の強みを活かした大学運営を行うことを期待しています。この流れに沿って文部科学省は各大学にミッション再定義を提案させ、研究大学と教育大学に差別化しています。教育大学に対しては、教育改革に関する教育改革のための競争的資金によって教育改革を促しています。今後加速化する少子高齢化社会においては現在の国立大学法人のうち、十分の一しか必要でなくなると言われています。文部科学省はこれまで幾度も大学改革を行ってきました。しかし、文部科学省の改革ごとに大学教員の論文数と論文のインパクトファクターが下がってきています。大学院学生においても修士一年の後半から就職活動が始まり、学生たちは、研究の合間に活動するのではなくそれだけにかかりきりとなっています。研究室で鍛えることもできず学生を社会に送り出さざるを得ない状況です。このような大学の現状を考えると大学はどうなってしまうのか、大学で研究ができるのか、研究室で鍛えた学生を社会に輩出することができるだろうかと思ってしまう。

最近の大学の状況を見るにつけて大学のマイナスの面を強調してしまいました。しかし、まだ大学教員は好きな研究をやろうと思えばできる状況が残されています。大学に入学してきた学生たちも学問や研究の面白さをわからないわけではないと信じています。最終的な結論は、どんな状況にあっても良い研究を頑張っていれば道は拓けるといことです。嫌なことだとなかなかできませんが、好きなことだと寝食忘れてのめり込むことができます。分析化学は、分子の情報を科学で解明する素晴らしい学問です。年寄りもまだまだ頑張りますが、どんな状況であっても分析化学を志す若手の研究者には、あなたの素晴らしい個性で好きな研究を行い、世界に挑んで頂きたいと祈念いたします。

[Shigeori TAKENAKA, 九州工業大学大学院工学研究院, 日本分析化学会九州支部長]